

上山藩鼓笛隊の「英式マルス」

——佐竹徳太郎資料の分析より——

奥中 康人

文化政策学部 芸術文化学科

幕末維新期に存在したとされる上山藩の鼓笛隊の実態については、資料が十分ではなかったため、不明瞭であったが、山市図書館（山形県）が所蔵する佐竹徳太郎資料の中に、上山藩士渡辺藤佐が写した『鼓譜』の複製本が存在することを確認した。本稿は、複製本の渡辺『鼓譜』を分析することによって、当時の鼓隊、鼓笛隊のレパートリーを具体的に把握するとともに、その中の一曲「英式マルス」が、現在の上山藩鼓笛隊保存会が伝承する「早足」行進曲と一致することを明らかにした。従来、上山藩鼓笛隊はフランス式、あるいはオランダ式との関係が有力視されていたが、そうではなく、幕末維新期のある時期に「英式マルス」や「喇叭マルス」（これも英式）が必要とされ、演奏されるようになったと理解するのが妥当と考えられる。

はじめに

山形県山市の無形文化財に指定されている上山藩鼓笛隊保存会は、篠笛、小太鼓（スネアドラム）、大太鼓（バスドラム）という編成の鼓笛隊で、幕末維新期に由来すると考えられている行進曲「早足」をはじめとする数曲を現在も伝承している。ヨーロッパ音楽の要素を多分に含むスネアドラムのリズムに、篠笛のメロディが結びついた音楽は非常に珍しく、音楽史的にも重要である。

この上山藩の鼓笛隊については、すでに拙著『幕末鼓笛隊——土着化する西洋音楽』（二〇二二）の第三章「明治期における旧藩頭彰と士族——天童藩と上山藩の鼓笛隊」で、その歴史やレパートリー等を考察したのだが、どちらかといえば、明治から現在にいたるまでの継承活動の変遷に力点を置いた。ただ、それは幕末維新期の実態を示す資料が豊富ではないために、明治以降を扱わざるを得なかったという消極的な事情によるものでもあった。

幕末維新期の上山藩鼓笛隊について不明な点が多いことは、インターネットを検索して鼓笛隊の紹介文をみるだけで簡単にわかる。たとえば、山形県教育局生涯教育・学習振興課と山形県生涯学習文化財団による「ふるさと塾アーカイブス」のウェブページでは、上山藩鼓笛隊保存会について、

上山藩鼓笛隊は、戊辰の役の頃に上山でフランス式の軍隊訓練を行った折に奉奏されたことが始まりと伝えられます。その後一時中断したものの、昭和2年に復活し、山市の無形文化財に指定されました。

と述べているが、市の文化財を紹介する山市のページでは、

戊辰の役の頃上山藩兵のオランダ式訓練時に奏楽された。それが今迄残ったのは全国でも稀な例。大太鼓1人小太鼓2人篠笛6～8人の編成。

と述べている。県は「フランス式の軍隊訓練を行った折」と言い、市は「オランダ式訓練時」と言い、真っ向から対立しているのだが、これは県と市の仲が悪いからではなく、この件について明確に答えてくれる資料が存在しないことに起因している。

ところが、筆者（奥中）は、存在しないと思われる複数の資料が、山市立図書館に所蔵されていることを知り、それらを閲覧・調査することができた。この調査により、これまで不明瞭であった幕末維新期の上山藩の鼓笛隊について、いくつかのことが明らかになった。

上記の「フランス」「オランダ」問題について言つと、そのどちらでも

なく、実は「英国」であり、現在演奏されている「早足」は「英式マルス」という曲名であった^三、という結論が導き出される。

一・上山藩の鼓笛隊について

上山藩鼓笛楽保存会は、上山城内にある月岡神社の祭礼で奏楽をおこなうことを主な目的として、昭和四十七年に創設された。その母体となったのは、昭和前期の上山城下の青年たちで、さらに過去に遡ると、明治期には旧上山藩士の子弟たちが担っていた^四。明治十一年、月岡神社の祭礼に土族の甲冑隊が参加するのにあわせて、旧藩時代に存在した鼓笛隊を再結成したのが始まりだという。実は、幕末に小太鼓（スネアドラム）や鼓手が存在したことを示す文献は複数確認できるのだが、笛や笛手、笛と小太鼓の合奏（鼓笛隊）があったことを示す文献は見当たらない。しかし、幕末維新期の上山藩には鼓笛隊が存在したとされている。もちろん、文献に記載されていないことは、史実としても存在しなかったことになる、という訳ではない。明治十一年の再結成時には旧藩時代のメンバーも生きていたはずなので、あまりにも自明なことを問い直す必要は感じられなかったのかもしれない。

当時、上山の周囲になら、鼓笛隊の存在を確認できる。たとえば、慶応四年四月、笹谷峠を越えた奥羽鎮撫軍が山形城を経由して上山城にやってきて、鼓笛隊（おそらく薩摩藩の鼓笛隊か）がマーチを演奏した^五。また、上山藩から北に約二十五キロのところに位置する天童藩では、同年五月頃になって「一小隊」につき「太鼓手一人」「笛手一人」が存在したことを示す資料もある^六。しかし、これらはいずれも上山藩の鼓笛隊ではない。

上山藩の鼓笛隊については、郷土史家の寺尾英量が太正期に記した「上山藩戊辰の役始末」が重要な典拠となってきた^七。上記の「ふるさと塾アーカイブス」が言う「フランス」説は、おそらく寺尾の以下の文章によるものと思われる^八。

鳴物（楽隊仏蘭西式）

大太鼓一、小太鼓二、笛若干より成る所謂「ピーヒヤレ、ヒヤー」の譜なり

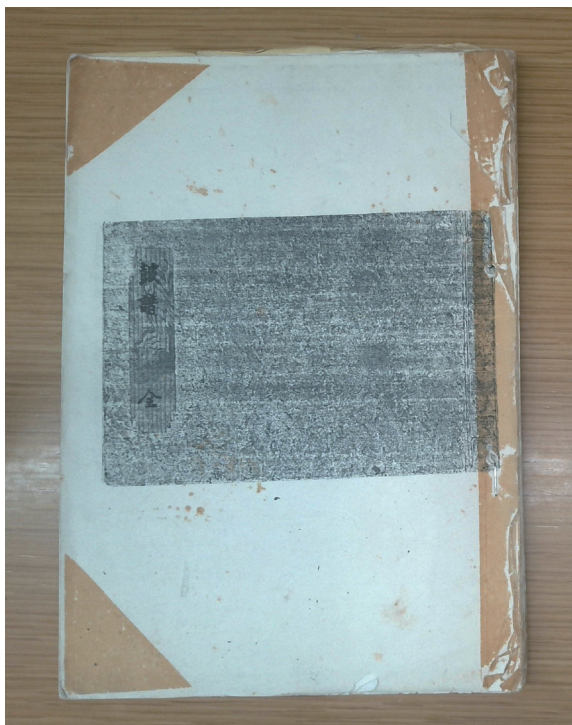
これは、戊辰戦争当時の上山藩が装備していた「兵器の大体」を述べらるくだりに記されているので、戊辰戦争時に「仏蘭西式」鼓笛隊が存在したかのように読み取れる。

しかし、上山藩がフランス式を採用したのは明治二年になってからであり（元上山藩兵制^九）、楽隊（鼓笛隊）が兵制に対応するなら、フランス式採用の前に「鳴物（楽隊仏蘭西式）」があったというのは不自然であること、また、寺尾が同じ「上山藩戊辰の役始末」で紹介している「当時我藩の総動員計画」（慶応四年四月）の名簿には、「太鼓」として「司令士小野素平」を筆頭に鼓手十名の名前が並んでいるものの、笛・笛手は一切みられないこと、そして、そもそも現在まで各地に残されている当時の軍楽の楽譜を見る限りでは、フランス式の太鼓と笛の合奏譜、鼓笛譜は存在しない（フランス式の兵制では、ラッパを用いるのが一般的である）こと、以上の理由から、この「鳴物（楽隊仏蘭西式）」については、筆者は疑いを持っており、支持できない。慶応三年生まれの寺尾英量にとって、月岡神社の鼓笛隊は慣れ親しんだ音楽であったはずだが、鼓笛隊の成立については、その身近さゆえに筆が滑ったように見える。他方、上山市が述べる「オランダ」説は、郷土史家で『上山鼓笛楽のあゆみ』（一九七七）の著者、佐竹徳太郎（二〇一一）の見解に依拠しているようだ。佐竹は、上山市に残る昔の資料を丹念に収集し、藩士渡辺藤佐による慶応期の写本『鼓譜』（湯上文書）や、藩士岩瀬氏による『太鼓手心得序目』（斎藤文書）などから、幕末の上山藩の小太鼓（スネアドラム）が、オランダ式（オランダを経由して伝わった演奏法）であったことを突きとめた。この佐竹の判断は間違っていない。しかしながら、このオランダ式は、あくまでもスネアドラムだけであって、笛が加わった鼓笛隊ではない。したがって、これに依拠した上山市の「オランダ」説も正確とはいえない（実は佐竹は、鼓笛隊については、寺尾英量の一節に依拠して「フランス」説をとっている^{一〇}）。

いずれにせよ、佐竹が参照した渡辺藤佐の『鼓譜』（以下、渡辺『鼓譜』）と岩瀬氏の『太鼓手心得序目』は、上山藩軍楽の慶応期の実態を示す貴重な一次資料のだが、筆者が最初に調査をおこなった二〇〇三年頃には既に原本は行方不明になっており、残念ながら閲覧できなかった。

二・上市市立図書館所蔵の「佐竹徳太郎資料」について

ところが、佐竹の没後に上市市立図書館に寄贈されていた「佐竹徳太郎資料」に、『鼓譜全』（A-131）という資料が含まれており、これが行方不明になった渡辺『鼓譜』の複製本【図一】であることを確認した（以下、佐竹による複製本を「佐竹『鼓譜』」と記す）。佐竹は、渡辺『鼓譜』を湯上家から借りたとき（おそらく昭和五十年前後）にこれをコピー機で複写し（白黒）、他の関連資料と合わせてホチキスで綴じて、所持していたのである^二。



【図一】佐竹徳太郎資料の『鼓譜全』上市市立図書館所蔵（A-131）

その後、佐竹は『上山藩鼓笛楽のあゆみ』のなかで渡辺『鼓譜』の最初の頁と奥付の二枚の写真【図二】を掲載したが、おそらく紙幅の都合で、収録されている個々の合図・楽曲については詳述していない。奥付は以下の通り。

慶応二丙寅乃とし

浪華在番中

写し者也

同三年丁卯春正月

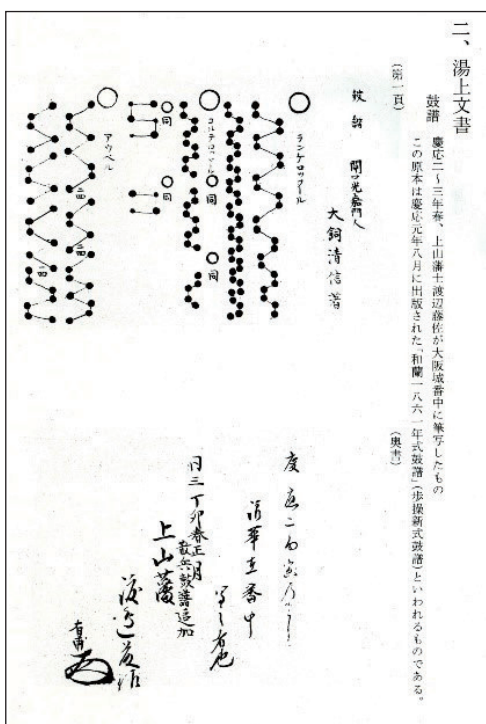
散兵鼓譜追加

上山藩

渡辺藤佐

二、湯上文書

鼓譜 慶応二丙寅春、上山藩士渡辺藤佐が大坂城番中に筆写したもの
この原本は慶応元年八月に出版された和蘭一八六一年式鼓譜（歩操新式鼓譜）といわれるものである。
（第一頁）
（奥付）



【図二】『上山藩鼓笛楽のあゆみ』より

そこで、まず、佐竹『鼓譜』を介して、渡辺『鼓譜』がどのような内容であったかについて概観しておきたい。

渡辺『鼓譜』は、【図二】に記されているように大飼清信^三が著した

「鼓譜」(以下、犬飼「鼓譜」と記す)が大部分を占めている(一〜四十四頁)。犬飼「鼓譜」は、基礎練習(七種類)、行進曲(七曲)、そして「撒兵之部」のドラムコール(二十五種類)、という三分部構成になっている。

「ランケロツフル」「コルテロツフル」「アツベル」「フルハーデリンフ」「ゲ子ラーレマルス」「タブツ」「アフタラツプ」

「ティーンストマルス」「フランスマルス」「レテートマルス」「コロニアールマルス」「ヤツパンマルス」「速定新手」「駈定」

撒兵之部

「散布」「進軍」「静止」「点火」「放火止」「退軍」「斜メ右」「斜メ左」「右へ向ケ」「左へ向ケ」「右向キ廻レ」「右翼前へ」「左翼前へ」「集合」「円陣」「二伍円陣」「右翼後」「左翼後」「右翼前左翼後」「左翼前右翼後」「大隊ノ後へ集合」「寝」「起」「鼓手呼集ムル節用」「旗持ヲ呼節用」

最後の「旗持ヲ呼節用」の後には「鼓譜ノ大尾」と記されていて、ここで犬飼「鼓譜」は終結する。

念のため、筆者が所有している刊本の犬飼清信「鼓譜」(『歩操新式』(慶応元年)に収録)と照合すると、タイトルやリズムだけでなく、レイアウトまでほぼ同一であることから、これを底本として写した可能性が高い。

ところが、渡辺『鼓譜』は、さらにその次のページに、

「路定」「カケ足」「ナミ足」

の三曲が追記されており(四十五〜四十八頁)、さらに「撒兵鼓則」というタイトルで、四十九種類のドラムコールが続く(四十九〜六十二頁)。

「前へ進」「左右へ開ケ」「静止」「打カレ」「打方止メ」「右ヲ向」「左ヲ向」「斜右」「正面」「斜左」「正面」「右向廻レ」「後トヘ下カレ」「右翼前へ」「左翼前へ」「右翼後トヘ」「左翼後トヘ」「右翼集合」「左翼開」「左翼集合」「右翼開」「中央集合」「撒開」「二伍尖陣」「二伍開ケ」「二伍尖陣」「二伍開ケ」「円陣作レ」「同開ケ」「右翼前左翼後トヘ」「左翼前右翼後トヘ」「寝打」「起ス」「右平面」「左平面」「右側面」「左側面」「組々右」「組々左」「右本隊ニカエレ」「左本体ニ帰レ」「左右本隊ニ帰レ」「撒兵速定」「同」「ストロムマルス」「ハンドマルス」「タンフルスアツヘル」「メルハルミス」「撒兵休太鼓之譜」

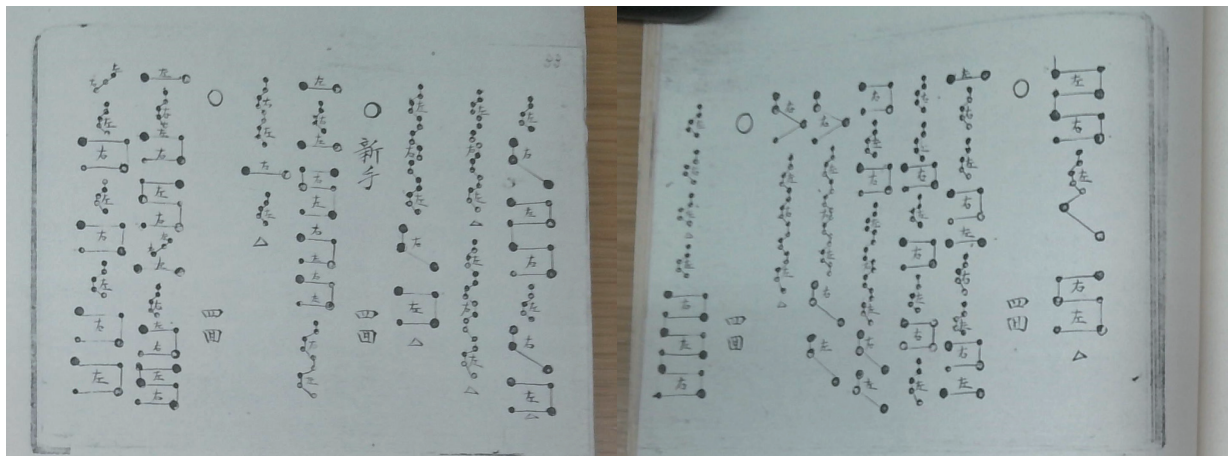
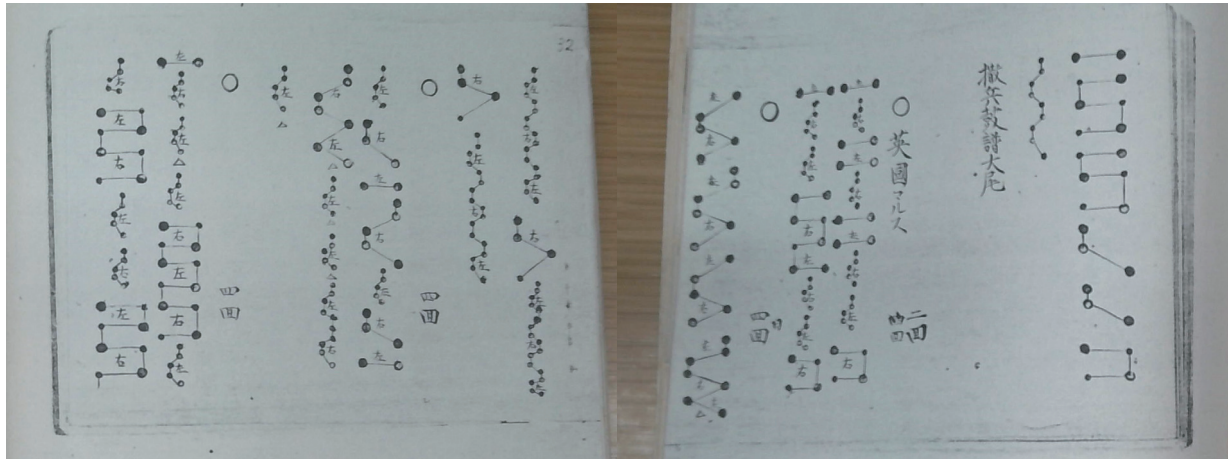
この末尾には「撒兵鼓譜大尾」と記されているので、ここで「撒兵鼓則」が終わる。

表記のゆれ(「撒兵鼓則」と「撒兵鼓譜」)はあるものの、この四十九種のドラムコール(四十九〜六十二頁)が、奥付にある「同三年丁卯春正月ノ散兵鼓譜追加」に該当し^三、一〜四十四頁の「鼓譜」が「慶応二丙寅乃としノ浪華在番中ノ写し者也」ということになるだろう(「路定」「カケ足」「ナミ足」(四十五〜四十八頁)がいつ記されたのかは判断に迷う)。

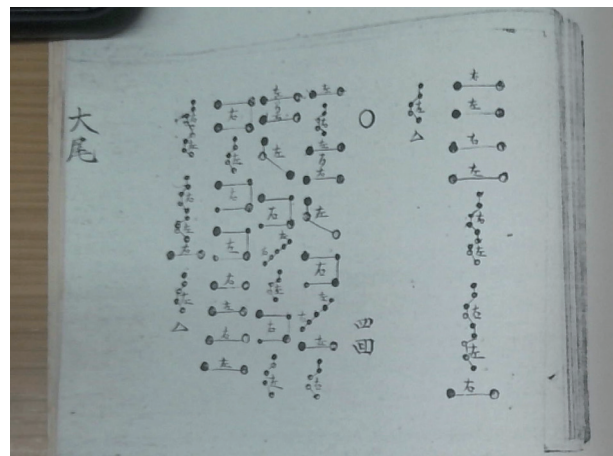
慶応二年に渡辺が写した犬飼「鼓譜」の後半部分「撒兵之部」のドラムコールは二十五種類であったが、慶応三年正月に書き加えた「撒兵鼓則」は四十九種類で、約二倍に増えている(重複するドラムコールもあるので、全面的に更改したのではなく、増補したと言っほうが正確か)。慶応三年になって、調練がより高度化・複雑化して、必要なドラムコールが増えたためであろうか。どちらもタイトルにはオランダ語が用いられているので、慶応三年正月の時点では従来のオランダ式が引き続き用いられているように見える。

渡辺『鼓譜』には、この「撒兵鼓譜大尾」のあとに、さらに二曲の行進曲が記されている。タイトルは「英式マルス」と「喇叭マルス」という。

「英国マルス」【図三】は九節(第一〜六節と「新手」三節)で構成さ



【図三】「英国マルス」



れていて、それなりに長い行進曲である。鼓譜の中央に記されている漢字の「左」「右」は、左足、右足のステップを示しているので、このステップを数えると、二二八歩（繰り返しをしない場合）。行進曲は二歩で一小節なので、一一四小節になる。

これがどのような曲（リズム）であるかについては後述するとして、佐竹は当然、渡辺『鼓譜』に「英国マルス」が収録されていることを認識していたはずである。だが、『上山藩鼓笛楽のあゆみ』では、この曲について何も触れていない。もっとも同書は、渡辺『鼓譜』の他の曲やドラムコールについても、ほぼ言及していないので、「英国マルス」に触れなくとも不思議ではない。おそらく、佐竹は「ティーンストマルス」や「ヤツパンマルス」と同じようなドラム・マーチが後から加えられたという程度の理解で済ませたのであろう。

しかし、これは佐竹にとって痛恨のミスであった。なぜなら、この「英国マルス」こそ、上山藩鼓笛楽保存会が今も大切に継承・演奏している行進曲「早足」に他ならないからである。

三. 佐竹が参照した山国隊

佐竹がフランス説を支持した理由は、寺尾の著述の他にもう一つある。上山藩の鼓笛隊と非常によく似たメロディを継承している山国隊（京都市）の鼓笛隊が、フランス式と言われていたからである。

上山藩鼓笛楽保存会が演奏する行進曲「早足」は、一般によく知られている「維新マーチ」、つまり、幕末の時代劇などで、東征する官軍の先頭で鼓笛隊が演奏していたというあの曲のヴァリエーションである^{一四}。佐竹は、「維新マーチ」が、山国隊に由来すること、そして山国隊もこの曲の演奏を継承していることを知っていた^{一五}。「佐竹徳太郎資料」にある「山国鼓笛楽資料」(A-235)には、当時の山国隊の代表草木良夫や山国小学校の校長壇太一からの手紙、そして山国隊が用いる「行進曲」の鼓譜も含まれている。

山国隊は、戊辰戦争に自主的に参加した農兵で、慶応四年二月に京都を出立するときには単に小銃で武装した小隊であったが、各地を転戦後、

明治二年には、笛・小太鼓・大太鼓の編成による鼓笛隊を先頭に、故郷の山国村に帰ってきた。それ以来、山国護国神社の慰霊祭や山国神社の例祭を演奏機会として奏楽を継承したのだが、山国では、この鼓笛隊はフランスの調練に係っていると伝えられてきた。佐竹が受け取った壇太一からの手紙にも「フランス式吹笛と打鼓を練習したのが山国鼓笛隊のはじめといえまじょう」とある。

郷土史家としての先輩である寺尾英量が「フランス」と主張しただけでなく、よく似たメロディをもつ山国隊も「フランス」だという。こうしたことから佐竹は、「資料に乏しい」ことを気にながらも、やはり「フランス」で間違いないと確信をもつに至ったようだ。

しかし、寺尾の主張が根拠に欠けると同じように、実は山国の人々による「山国隊の鼓笛隊は「フランス式」である」という認識についても再検討を要する^{一六}。

山国隊のリーダーであった藤野斎の日記によると、山国隊は京都出発前に洋式調練の経験を積んでいたが、江戸で「束（足）羽徳之助始メテ仏式ヲ教導セラル」（慶応四年三月二十一日）とあり^{一七}、フランス式の調練をうけたことがわかる。しかし、この一文だけを根拠に、これ以降のすべての期間についてフランス式だったのか、調練のスタイルだけでなく鼓笛隊についても適用してよいのかは、即断せずに慎重になったほうがよい。

たとえば、「仏式ヲ教導セラル」の半年後、藤野斎の日記の明治元年九月二十八日には、以下のようなトラブルがあったことが記されている。

山国隊が江戸から京都に帰る準備をしていたとき、因幡若桜藩の今井波之允隊と合同で調練をしたところ、両隊の兵式が異なるので調練がうまくいかず、どうするかを巡って揉めたいらしい。そこに鳥取藩の参謀で山国隊の隊長も兼ねた河田景与が仲裁に入った^{一八}。

河田之ヲ判シテ云、英仏何ソーナラン乎、不若、英ハ英トシ仏ハ仏トセハ然ラント。依之我（山国隊）ハ以前ノ英式ヲ操練シ、今井ハ今井ニテ仏ヲ操練スル事トナレリ

河田は、「英式と仏式がどうして一つになる（＝一緒に調練できる）だろうか、いやならない」と反語表現を用いつつ、むしろ、無理に合わせるのではなく、それぞれのやり方で調練したほうがよいと提言した。これにより、山国隊はこれまでの「英式ヲ操練シ」、今井隊は「仏ヲ操練スル」ことになった、と藤野は述べる。つまり、この時期の山国隊はどうやら英式を採用していたようなのである。藤野の日記を丁寧に読んでも、山国隊がいつから英式を採用するようになったのかは分からない。ただ、山国隊が笛とスネアドラムの練習を始め、鼓笛隊を編成しようとしたのも、これと同じ時期なのである。単なる偶然かもしれないが、これは山国隊の鼓笛隊が「英式」であった可能性を示唆しているように思える。

また、二〇一八年に、旧山国隊の隊士の家から手書きの鼓譜が発見されているのだが、その表紙には『英国鼓譜』と記されていることも、これを傍証する^{一九}。

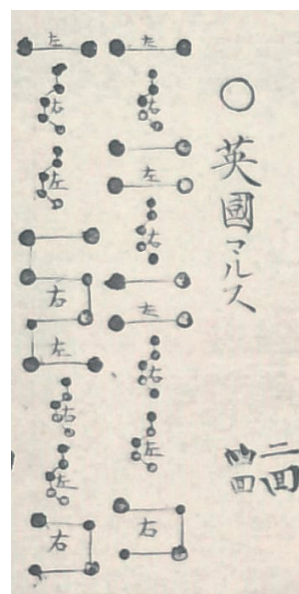
四．「英国マルス」と「早足」の比較分析

上山市内には明治期に筆写された鼓譜（斎藤文書）の「早足」（以下、斎藤「早足」と記す）があり、現在の上山藩鼓笛楽保存会は（鼓譜は用いず、口伝で）このリズムを「早足」として継承している。

つまり、斎藤「早足」と「英国マルス」のスネアドラムが同じリズムであることを確認できれば、現在の「早足」のオリジナルが「英国マルス」であることを証明でき、さらに、渡辺「鼓譜」の「英国マルス」に笛の楽譜は記載されていないが、同じような笛の旋律も存在したことが推測できるだろう。

*以下、「英国マルス」と斎藤「早足」について、これらが同一であることを証明するために、それぞれについて詳しい説明が続くが、これをとばして「五．喇叭マルス」と英式ラッパ譜」に進んでも一向に差し支えない。

たとえば、各鼓譜の冒頭の十六歩、つまり八小節間については次の通りである。



【図四】 渡辺「鼓譜」『英国マルス』の冒頭八小節



【図五】 斎藤「鼓譜」『早足』（一番一節）

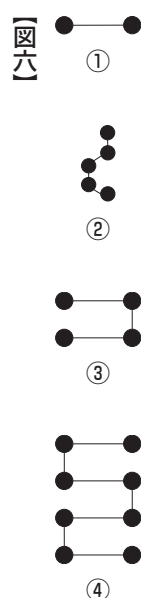
一見する限りでは、「英国マルス」【図四】と斎藤「早足」【図五】は大きく異なっているようにみえる。しかし、上山藩鼓笛楽保存会の演奏習慣や、鼓譜の記譜上のルールを踏まえた上で比較をすれば、両者がほぼ同一であることは、比較的簡単に立証できる（ただし、斎藤「早足」の最初の九打（ステ打）は、短い序奏フレーズで、「英国マルス」には記されていない。そのため斎藤「早足」の冒頭九打は無視し、それ以降を対象として比較する）。

【図四】と【図五】をよく観察してみるとそれぞれいくつかの限られたリズムパターンだけで構成されていることがわかる。

「英国マルス」【図四】に記されているリズムは、

- 二打〔両手で同時〕（【図六】の①）
 五打〔右_上左_上右〕（【図六】の②）
 四打〔左_上右_上左〕（【図六】の③）
 八打〔右_上左_上右_上左_上左_上右〕（【図六】の④）

の四つのパターンだけで構成されている。



このうち、②の五打〔右_上左_上右〕は、スネアドラムの基本奏法（drum rudiments）で、一般にstroke rollと呼ばれる【譜例一】。装飾音符的な四打〔右_上左_上〕と最後の一打〔右〕からなり、〔右_上〕〔左_上〕の短い連続音は、スネアドラムの表面の張力を利用してスティックをバウンドさせるダブルストロークを用いるところが特徴である。

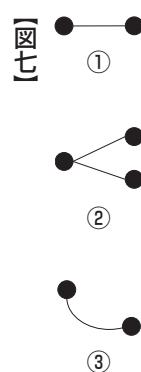
また、③の四打〔左_上右_上左〕は、tamという基本奏法【譜例二】で、④の八打〔右_上左_上右_上左_上左_上右〕は、〔左_上〕ではなく〔右_上〕から始まるが、このtamを繰返したものである。



これに対して斎藤「早足」【図五】は（既述のとおり、冒頭の九打を除く）、

- 二打〔両手で同時〕（【図七】の①）
 三打〔右_上左_上右〕（【図七】の②）
 二打〔曲線でむすばれている左右〕（【図七】の③）

の三つのパターンだけで構成されている。



「英国マルス」と斎藤「早足」とを比較してみると、「英国マルス」の五打（stroke roll）（【図六】の②）に対応する場所には、斎藤「早足」は三打〔右_上左_上右〕（【図七】の②）があり、明らかに打数が異なる。しかし、仮に五打の〔右_上〕と〔左_上〕の連続する二打を、それぞれ一打に、つまりダブルストロークをシングルストロークに簡略化すれば、三打〔右_上左_上右〕となり、斎藤「早足」の三打〔右_上左_上右〕と一致する。

また、「英国マルス」には、【図六】の①の左右同時の二打が二回連続する（合計四打）ところが2ヶ所あり、斎藤「早足」の該当箇所は二打〔曲線でむすばれている左右〕（【図七】の③）となっており、異なっているが、これも、「英国マルス」の一回目の右手、二回目の左手を省略すれば、同じになる。

同様に「英国マルス」のtam（【図六】の③）も、二打目の右手、四打目の左手を省略して簡略化すれば、斎藤「早足」の二打〔曲線でむすばれている左右〕（【図七】の③）と同じになる（【図六】の④も同様に簡略化すると、【図七】の③の二回繰返しに相当する）。

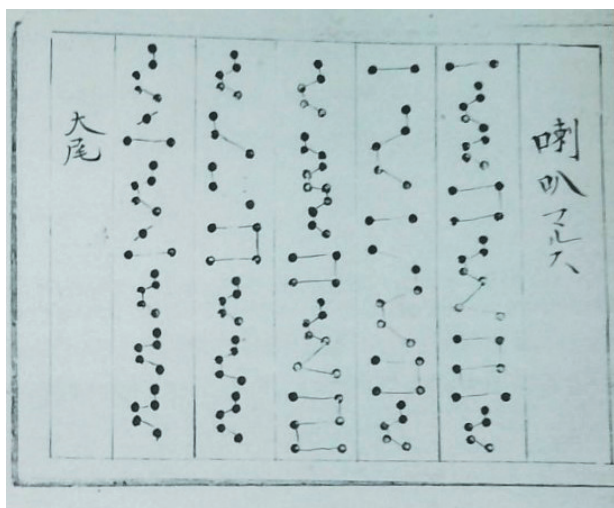
口頭伝承的な音楽の場合、時間の経過に従って内容が変化し、とりわけ省略・簡易化、つまり演奏が易しくなる方向に変容していくことは珍しくない。「英国マルス」と「早足」は、表面的にみれば打数が大きく異なっている。しかしながら、省略されているのはリズムの装飾的な部分

であり、リズムの骨格部分については、まったく変化していないと言っ
てよい。したがって、「英国マルス」と斎藤「早足」のスネアドラムを一
緒に演奏しても、さらに言うなら、「英国マルス」のスネアドラムに現在
の篠笛のメロディを合わせて演奏しても、まったく違和感なく曲として
成立することになる^二。

一曲の全体を事細かに検証する余裕はないが^三、これに続く「英国マ
ルス」の五節までは、小さな相違はあるものの、斎藤「早足」、そして現
在の「早足」と、同一リズムと判断すべきであり、「早足」のオリジナル
が「英国マルス」であることに疑いをさしはさむ余地はない^四。

五. 「喇叭マルス」と英式ラッパ譜

渡辺『鼓譜』の分析に戻りたい。「英国マルス」の後には、空白の二頁
を挟んで、「喇叭マルス」という鼓譜【図八】が追記されている。



【図八】「喇叭マルス」

掲載されているのは鼓譜だけで、ラッパの楽譜はない^{一四}。この曲につ
いても、佐竹は「上山藩鼓笛楽のあゆみ」では何も言及していないので、
原本の渡辺『鼓譜』が行方不明となつて以来、現在まで、この楽曲の存在
は知られていなかった。

この鼓譜「喇叭マルス」は、慶応三年に刊行された『太鼓教練譜』（筆
者所蔵）に収録されている「吹角合鼓並足」【図九】の鼓譜とほぼ同一
であり、しかも『太鼓教練譜』にはラッパ（吹角）のパート譜「吹角譜
並足」【図一〇】も掲載されている。



【図九】「吹角合鼓並足」



【図一〇】「吹角譜並足」

「吹角譜並足」がどのようなメロディなのかは興味のあるところだが、
「五線」の楽譜とはいえ、特殊な記譜法のため、解読は難しい。ただし、
筆者が所有する『喇叭譜』（年代不明）には、これと同「曲」と思われるラッ
パ譜「運動」が収録されている（【図一一】の上）。そしてこの『喇叭譜』
の別ページに記載されている「退行」や「集合」^{一五}【図一二】の下）は、

『英国歩操練法』(一八六五)にも「退軍」「散開」として収録されている(図二二)三六。したがって、渡辺『鼓譜』の「喇叭マルス」も英式のラッパ譜の一曲である可能性が高い。



【図二一】『喇叭譜』の「運動」、
「退行」「集合」

【図二二】『英国歩兵練法』の
「退軍」と「散開」

六、渡辺『鼓譜』の構成からみる成立プロセス

佐竹『鼓譜』に含まれている渡辺『鼓譜』の全体構成を整理しておきたい。

「鼓譜」(犬飼清信)	一	～四十四頁
「路足」「カケ足」「ナミ足」	四十五	～四十八頁
「撒兵鼓則」	四十九	～六十二頁
「英国マルス」	六十二	～六十六頁
白紙	六十七	～六十八頁
「喇叭マルス」(縦野線)	六十九	頁
「渡辺『鼓譜』とは無関係な紙が四頁」	七十	頁
白紙(縦野線)	七十	頁

奥付

七十一頁

佐竹が、六十九頁と七十頁の間に「無関係な紙」を挟んだ理由は——推測の域を出るものではないが——原本の渡辺『鼓譜』には「喇叭マルス」の後に何枚か縦野線の頁があったが、そこには何も情報が記されていないかったために、佐竹は複写する必要はない(「コピー料金を節約するために?」)と考え、しかし備忘のために無関係な紙を挟んでおいて綴じたように見える。七十頁の縦野線の白紙については、奥付の七十一頁をコピーした際に、見開き右側の七十頁も一緒にコピーされたとすれば辻褄が合う。

こうしたことから、渡辺藤佐による『鼓譜』の作成プロセスは、次のように推定できる。

- ① 慶応二年に少なくとも犬飼「鼓譜」(四十四頁まで)を写し、最終頁に奥付を記す。
- ② 慶応三年一月に「撒兵鼓則」(六十二頁まで)を写し、奥付に「慶応三年…」を追記する。
- ③ さらに「英国マルス」(六十二頁以降)、「喇叭マルス」(六十九頁以降)が追加され、野線のある白紙が数頁残った(縦野線の紙に記されているのは「喇叭マルス」だけなので、「喇叭マルス」を増補する際に縦野線紙が用いられたか)。

③の追加は、②と同じ時期であったとしても不思議ではないが、これまでに論じたように、追加の二曲(「英国マルス」と「喇叭マルス」)がいずれも「英」との関連を示唆しているので、やはりある程度、後になってからとみるほうが妥当だろう。つまり、この①から③までのプロセスが、そのまま慶応二年以降の上山藩の動向をダイレクトに反映しているとすれば、上山藩が「英国マルス」や「喇叭マルス」を必要とした時、つまり、これらの楽曲を演奏する必要性に迫られた時が、③を筆写した時期になりそうだ。

まとめと今後の課題

本稿は、佐竹徳太郎が作成した複製本『鼓譜』の内容を分析することによって、つまり上山藩士の渡辺藤佐「鼓譜」を分析することによって「英式マルス」や「喇叭マルス」の存在を明らかにし、さらに、この「英式マルス」が現在の「早足」と同一であることを示した。もっとも「英式マルス」「喇叭マルス」が存在するからといって、上山藩が正式に英式兵制を導入したのかは判断できない。これらの曲がどこからやってきたか、どのような目的で採用されたのか等については、本稿の範囲を大きく超えてしまうので、別に稿を改めたい。要点だけを大雑把に示しておく、おそらく文久三年に横浜に駐屯した英軍が何らかの契機となり（しかし、英軍がこの曲を演奏していたとは考えにくい）、この曲が誕生した^八。その一つの痕跡として慶応元年に刊行された『英国鼓笛譜』に掲載された「早足」を挙げることができる。また、慶応三年に京都で薩摩藩の鼓笛隊が演奏したのがこの曲ではないかと推測され^九、戊辰戦争における官軍東征にもなっており、さらに広がっていったと考えられる。

筆者の印象では、上山藩へは、横浜の英軍や『英国鼓笛譜』からではなく、戊辰戦争の終盤、上山藩が官軍に降伏し、薩摩藩の指揮下に入ってから庄内攻略に加わった時期以降、きわめて短期のうちに伝わったのではないかと推測される。この曲ではないが、しかし、「英国マルス」も「喇叭マルス」も行進曲であることから、何らかのパレードのために必要とされたのではないかと想像している。いずれにせよ、まずは同時代の他地域における同曲の演奏事例を、丁寧に整理する必要があると考えている。

*本研究は日本学術振興会科学研究費助成事業、基盤研究(C)「幕末維新期における英式軍楽の研究——鼓譜「早足」の解説から見えること」(20K0014)の成果の一部です。

一 <https://www.yamagata-furusatojuiku.jp/actograph/1146/> (1014年五月十六日閲覧)

二 上山市のホームページ「市指定文化財」

<https://www.city.kanmifuyama.yamagata.jp/soshiki/25/km201301227.html> (1014年九月十日閲覧)

三 いまは誤解されるのだが、「オランダ式」「フランス式」「英式」等は、音楽上の様式を意味するのではなく、幕末維新期にあつては兵制のスタイルと理解されていると思われる。「英式マルス」も「スネアドラムの奏法やリズムはヨーロッパに由来するのは確かだが」この曲自体が英国から伝わった音楽とは考えにくい。注 四の後半(某音楽大家「洋楽渡来当時の思ひ出」)を参照。

四 鼓笛隊の指導は、山口吉十郎(一八六七—一九二九)、吉三郎(一八九三—一九三三)、吉五郎(一九一八—一九四二)の親子孫の三代と、城戸口正雄(一九〇六—一九八八)、計九(一九三三—二〇一五)の親子、計五名が担当しており、演奏実践が途絶えた期間も少ない。

五 上山市史編さん委員会編『上山市史』中巻、一三二頁。

六 「元天童藩兵制」(山形県史料 制度之部 兵制(明治二一六) 旧藩兵制) 国立公文書館デジタルアーカイフ。(<https://www.digital.archives.go.jp/img/pdf/3692887>) 四十一頁。

七 上山市史編さん委員会編『幕末・明治維新資料』三二七十四頁。

八 寺尾英重「上山藩戊辰の役始末録」上山市史編さん委員会編『幕末・明治維新史料』二一六—二一七頁。

九 「山形県史料 制度之部 制(明治三二六) 旧藩兵制」国立公文書館デジタルアーカイフ(<https://www.digital.archives.go.jp/img/pdf/3692887>) 四二二頁。

一〇 「上山藩鼓笛隊のあゆみ」五頁。

二 佐竹による複製本には「鼓譜全」とタイトルが付けられているが、最後に「歩操新式」の「鼓譜」(一三二頁)の「コピー」(大阪市音楽団のクラリネット奏者、大木親保が提供)と、オランダの海軍鼓笛隊の楽譜の「コピー」も一緒に綴じられていて、完璧な複製本を目指したものでない。

三 「歩操新式」の「鼓譜」には、「関口光嘉門人ノ犬飼清信著」とあるので、長崎海軍伝習所で最初にスネアドラムを学んだ関口鉄之助の弟子と考えられている。後に海軍軍楽隊に入つた中川安道は、慶応二年に江戸で「犬飼といふ太鼓の名人」からスネアドラムを習つたという(大津三郎「慶應二年の鼓手に軍楽創成期を聴く」十頁)。

四 よく見ると、「同二年丁卯春正月ノ散兵鼓譜追加」の二行は小さな字になっており、あとから書き加えられたことがはっきりとわかる。

五 奥中康人「幕末鼓笛隊と「維新マーチ」の伝播」(二〇〇四)。映画やテレビなどで演奏されている「維新マーチ」は、山国隊による演奏に基づいたもので、おそらく京都の映画撮影所が採用したことによって定着したと思われる。東征軍の鼓笛隊については、大塚武松編『石倉員親関係文書』に収録されている「大原重徳意見書」(明治二年三月六日)、「ブラック・ヤング・ジャパン」3(平凡社一九七〇)七十一頁。また、某音楽大家「洋楽渡来当時の思ひ出」(一九一七年一月)には、「英式訓練行進曲」として数字譜でメロディが提示されており、「其旋律は全く純日本式であつたことである」(七十六頁)と某音楽大家が述べている。某音楽大家が誰であるかは不詳だが、「御維新の際には、大小二本差しで、京都の御所の御番役を勤めた」と語っている。

六 山国小学校の校長、壇太一からの書面には「テレビを通じてこんな縁になることを嬉しく存じます」「先日NHKのドキュメンタリー番組でフランク堺が司会とあることから、佐竹は一九七三年一月四日の夜にNHKで放映されたテレビ番組「スポットライト「ヤッパン・マルス」」を見たい。

七 山国隊についての最も代表的な研究書である仲村研「山国隊」(一九六八)も「フランス」

を主張したことから、山国隊Ⅱフランス式が流布することとなった。しかし、仲村は、オランダ式の教練書『歩操新式』をフランス式とするなど、初歩的なミスが散見される。

二七 藤野斎『征東日誌―丹波山国農兵隊日誌』六十頁。

二八 藤野斎『征東日誌』一九二頁。

二九 この『英国鼓譜』は、おそらく現在の山国隊が演奏している「行進曲」のオリジナルにあたり、上山の「英国マルス」と同じ曲であると筆者は推測しているが、これについては改めて別稿で論じたい。

三〇 冒頭八小節のスネアドラムを五線譜で示す〔譜例三〕が「英国マルス」、〔譜例四〕が斎藤「早足」。

三 拙著『幕末鼓笛隊』（一〇七頁）では、斎藤「早足」は、おそろい5 stroke roll & flam を簡略化したリズムではないかと仮説を立て、冒頭八小節の復元案（図一三）を提示したが、この復元案は、今回発見した「英国マルス」の該当箇所と完全に一致している。

〔譜例三〕

〔譜例四〕

〔譜例五〕「英国マルス」と「早足」の冒頭八小節の比較譜

また冒頭八小節について「英国マルス」のリズムに現在の笛のメロディが適合することは次の五線譜を参照〔譜例五〕。

〔図一三〕左は斎藤「早足」、右は奥中による復元案（奥中『幕末鼓笛隊』一〇七頁）

17 Stroke Roll

Flam

5 Stroke Roll

Flam × 2

5 Stroke Roll

Flam × 2

5 Stroke Roll

5 Stroke Roll

Flam × 2

三 次に示す例（現在の「早足」一番節の最後の六小節「譜例七」）のように、笛のメロディとスネアドラムのリズムがほどよく対応している部分とみられる。「英国マルス」は現在の「早足」とほぼ同じリズムであり、これを偶然の一致とみなすことは困難である。やはり当時もこのような笛のメロディが存在したことを強く示唆している。

現在の笛

早足

英国マルス

現在の笛

早足

英国マルス

三 「上山藩鼓笛楽のあゆみ」の執筆者である佐竹徳太郎は、「上山や上山藩の歴史については詳しいが、鼓笛隊のメンバーとして演奏をした経験はなく（鼓笛隊氏名一覧表）（十八〜十九頁）に佐竹の名前は見当らない、鼓譜を読むこともできなかったため、「英国マルス」の鼓譜が「早足」であることに気がつかなかった」と思われる。

② 「上山藩鼓笛案のあゆみ」は、斎藤文書の二冊に「喇叭符」という鼓譜があること、「西洋大太鼓譜（山口渡御）にも「喇叭」というタイトルの鼓譜があることを（四〇五頁）、明治十一年の神興渡御行列の鼓笛隊に「吹角（ヒールパ）が含まれていること（七頁）を、まとめている。したがって渡辺「鼓譜」にはラッパ譜は収録されていないが、実際にラッパとスナドラムの合奏であったと推測される。

[illegible]

に含まれている）は、鼓手が心得ておくべきドラムコールや行進曲のタイトル一覧だが、これが作成された慶応三年八月の時点では、まだ「英国マルス」「喇叭マルス」は含まれていない。

二八 幕末に横浜で組織された菜葉隊は、駐屯する英軍から訓練の指導を受け、慶応元年十月より江戸西の丸に出張。毎月交代警衛することになり、その編成は「英式歩兵 大隊 砲兵 小隊」に「案隊」が付随していたという（『横浜開港五十年史』上巻 横浜商業会議所 一九〇九）

三三八頁、傍点筆者）。

二九（『慶応三年十一月』二十七日に至り日御門前に於て薩、長、土、藝四藩の親兵式の大覧あり流石に薩は服装帽も皆 様にて英式に依り大太鼓、小太鼓、笛等の案隊を先頭に立て正々堂々御前を運動せる様実に勇壯活発佐幕者をして膽を寒かしむ）（『谷干城遺稿』上巻（一九一二）五十九頁、傍点筆者）。

参考文献

- 大塚武松編『岩倉具視関係文書』第八(日本史籍協会一九三五)
大津三郎(散浪漁人)(慶応二年の鼓手)に軍樂創成期を聴く(桑達拾遺集その二)『フィルハー
モニー』(一九二七年三月)一〇十三頁
奥中康人『幕末鼓笛隊と(維新)マシンの伝播』『名古屋芸術大学研究紀要』二五巻(二〇〇四)
四十五〜五十九頁。
奥中康人『幕末鼓笛隊 土着化する西洋音楽』(大阪大学出版会二〇二二)
『上山市史編さん委員会編』『幕末・明治維新資料』(上山市史編集資料 第二十二集)(一九七七)
『上山市史編さん委員会編』『上山市史』中巻・近世近代編(一九八四)
肥家編『横濱開港五十年史』上巻(横浜商業会議所一九〇九)
佐竹徳太郎編『上山藩鼓笛樂のあゆみ』(一九七七)
島内登志衛編『谷千城遺稿』上巻(一九二二)
寺尾英眞『上山藩戊辰役始末録』『上山市史編さん委員会編』『幕末・明治維新史料』(一九七七)
五十七〜四頁。
藤野斎『征東日誌』丹波山国農兵隊日誌(『国書刊行会』一九八〇)
J・R・フラック(ねずまさし)訳『ヤング・ジャパン』3 平凡社(一九七〇)
某音楽大家『洋楽渡来当時の思ひ出』『教育研究』(一九一七年一月)七十五〜八十頁。

The *Eishiki* march played by the drum and fife corps of the Kaminoyama clan at the end of the Edo period: An Analysis of Satake Tokutaro Collection

OKUNAKA Yasuto

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

The historical fact of the fife and drum corps of the Kaminoyama clan during the Meiji Restoration was unclear due to a lack of sufficient documentation, but I have confirmed that there is a copy of the snare drum score "Kofu" copied by Watanabe Tosuke in the Satake Tokutaro Collection held by the Kaminoyama City Library, Yamagata Prefecture.

This paper analyzes Watanabe's "Kofu" to understand the repertoire of the fife and drum corps at the time, and clarifies that one of the pieces, "Eishiki" march is the same piece as "Haya-ashi," which is currently handed down by Kaminoyama Drum and Fife Music Preservation Society.

It is reasonable to understand that the drum and fife corps of the Kaminoyama was not related to the French or Dutch style, but to the British style, and that "Eishiki" march and "Rappa" (bugle) march (also British style) became necessary and were performed at some point during the period of the end of the Edo Restoration.